

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

篆書・隸書学習の応用 : 版木を用いた刻字制作と採拓

著者	金木 和子
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	3
ページ	154-148
発行年	2017-09-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000645/

篆書・隸書学習の応用

— 版木を用いた刻字制作と採拓 —

Teaching Methods for the Ten-sho and Rei-sho Styles

— Utilizing the Wooden Carvings and Takuhon Works Approach —

金 木 和 子*

KANEKI Kazuko

一、はじめに

高等学校芸術科〔書道Ⅰ〕〔書道Ⅱ〕の教科書を見ると、どの教科書をもっても篆書・隸書の書法の学習後、篆刻・刻字へと応用して、多角的に表現能力が高まるように工夫されている。

教育課程の編成上、単位数が少なくなっている高等学校もある。また内容においても、選択枠が多くなっている反面、学習する内容を狭くしているところもある。

本学において担当している「書道学特講（漢字応用）」の授業は篆書・隸書とその応用研究を主題として扱っている。この授業を受講する学生は、高等学校の書道の免許状を修得する者がほとんどである。

少ない時間の中で、「書道Ⅰ」での篆書・隸書学習を応用展開す

るのに、いかに幅広く活動し、生涯にわたり書を愛好する心情を育てることができるか、指導方法を考えてみたい。

二、篆書・隸書への導入

高校生にとって、今回の大学生にとっても芸術〔書道Ⅰ〕の「漢字の書」の学習で、篆書・隸書は初めて見る書体である。

篆書・隸書は、現在日常的に使用される書体ではないが、暮らしの中で目にする機会はある。

暮らしの中の書体探しをすると、より興味を持ち、書への関心・意欲を持つことができる。次にその一例をあげる。

①篆書

日本史で学んだ「金印」、切手、紙幣、御守、パスポート、

石碑の篆額など。

② 隸書

店の看板、門標、新聞の題字、神社・寺の扁額、表札、書籍、映画やテレビ番組の題字など。

このような身のまわりの書を調べ、その印象や効果を考えることにより、初めて見る書体ではなく、自分がすでに、何気なく見ていたことに気付くであろう。

三、篆書・隸書の臨書

幅広く、漢字の書体を学ぶため、臨書の学習においては、篆書・隸書の特徴、基本点画の用筆法を学び、代表的な古典臨書により、書写能力の向上を図ることが大切である。

ここに篆書・隸書の特徴と基本用筆をあげる。

(一) 篆書（小篆）

- ① 起筆は逆筆・藏鋒、送筆は中鋒。
- ② 横画は水平、縦画は垂直。
- ③ 字形は縦長。
- ④ 左右相称。
- ⑤ 線の太さは均一。
- ⑥ 画と画の間（分間）がほぼ均等。
- ⑦ 曲線的。
- ⑧ 起筆は右回り、左回り、逆方向からがあり、曲がりの部分も穂先が中央を通る。

(二) 隸書（八分）

- ① 起筆は逆筆・藏鋒。
- ② 運筆は中鋒（筆先が画の中央を通る）
- ③ 字形は扁平。
- ④ 横画は水平・等間隔。
- ⑤ 波磔がある（ただし、波磔をつけるのは一字の中で一画だけ）。

このように、特徴をとらえ、基本用筆をしつかり学び、古典臨書で、篆書・隸書の書法の技能を多角的に高めていく。

四、篆刻

篆刻で使用する篆書には、甲骨文、金文、印篆（漢時代の印などに使用されている文字）、小篆などがある。

しかし、これらは別々の書体と考えられるため、一つの印の中で混用してはいけない。

本来、漢字に関する幅広い知識が必要となるが、授業の中で十分な学習することは難しいので、篆書の専門字典を備えておくようにする。一例を示す。

- ・篆刻字林（三圭社）
- ・漢印文字彙（雄山閣出版）
- ・清人篆隸字彙（雄山閣出版）
- ・篆書篆刻字典（二玄社）
- ・総合篆書大字典（二玄社）

- ・金文字典（二玄社）
- ・印篆字典（二玄社）
- ・小篆字典（二玄社）

〔書道Ⅰ〕の篆刻においては、学生が自分自身の名印を制作することで、落款に使用する雅印を作り上げた喜びを味わい、臨書や創作で書き上げた作品に押印し、作品完成の達成感を味わうことができる。

白文の名印を刻る手順と、篆刻のさまざまな技法を理解する。多様な印を鑑賞することにより、篆刻に対する興味・関心を高め、その表現を自身の印に活かす。

以上の目標に向け指導することにより、学生は篆刻への関心が深まり、書作品を制作する意欲を掻き立てられ、押印の時の達成感は大いなものとなる。

五、刻字

今回は、隸書の学習の応用として行う。

刻字の魅力は、書くことに加えて刻るということにある。

そこで、刻字の最も基本となるものは、書稿である。一見矛盾するようにみえるが、これはそうではない。

このことは、実際に作品づくりをしてゆくと、刻み込んでいく感動が、いかに興味の高いものかということが、体を通して伝わってくる。

刻字を初めてやってみようとする人の多くが、この書稿よりも

刻ってみようという気持ちになるのは、ごく自然のなりゆきだということができる。

自分の書を、木の板（版木）などに刻して、鑑賞したり、実用品として使ったりするが、大学の授業では、表札または室内のオブジェのどちらにするか、学生に決定させる。

どうしたら感動的な刻字作品を作ることができるか考えてみる。

（一）書稿を十分に練る

刻ろうとする文字・書体（今回は隸書の応用として行う）が決まったらイメージを高めるために、書体について調べて書き、さらに一つの書体でも書風をいろいろ工夫するとよい。

また、書体・書風が決まったら、線の質をどうするか、造形の上から十分に検討する。

（二）大胆細心に双鉤をとる

双鉤（籠字）は、書いたものに対して正確にとるということよりも、刻るというところを重視して、書表現に加味省略を行うことが大切である。

ことに渴筆部分の処理を理解し、大胆にて細心に行うことがポイントとなる。

書いたものが、刻字となった時の姿を連想して創作すると良い。

（三）文字の線質を理解する

書稿による造形、線質、リズム感などを、ノミや刀の断片的な繋

がりで表現するので、文字の動きに対する筆意を刀意にかえることと、作品全体の総合的な理解が必要となる。

(四) 木材の性質を見極める

木材には木目がある。また木肌もそれに応じてあるので、これらをよく知って、ノミや刀を扱うことが仕上がりを美しくする。

(五) 色彩感覚を意識する

色彩はメーカーキップである。作品のイメージに従って、格調の高いものでなければならない。

(六) 根気よく刻る

一心不乱に、無心になって気を緩めず、しかし疲れたら休み、ゆつくりとした気分で一刀一刀入念に刻り上げることが、仕上がりの美しい作品を創ることになる。

(七) 刻字の制作手順（丸数字は写真番号に対応する）

- ① 文字をイメージしながら、古典作品、字典より調べる。
- ② 書稿を書く。木の大きさに紙を切り、調べた文字を参考にし、筆で書く。書体・書風・文字構成・線質など考えて、十分に練る。
- ③ 書稿の上に、薄い紙（雁皮紙など）を乗せ、細筆（初歩の人はボールペン）で籠字をとる。
- ④ 籠字をとった薄紙を板に乗せ、板に糊を付ける。
- ⑤ なで刷毛で半分ずつ貼る。
- ⑥ 全体を貼り終えたところ。

写真①

⑦⑧筆順に沿って文字全体を、籠字の外側二ミリ位のところを切

②

③

④



⑤

⑥

⑦

⑧

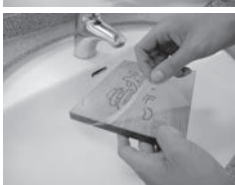
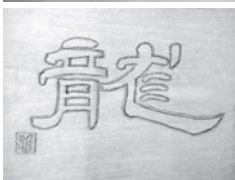


⑨

⑩

⑪

⑫



り出し刀で刻す（筋刻り）。

⑨⑩ノミ（刀）の裏を実線に向け、縦に打ち込み、V字形に刻る。角が割れないよう、縦に少しノミ（刀）を入れながら刻る。

⑪⑫刻れたら、水で全体を濡らし、剥がす。

本来は（八）の仕上げの着色になるが、今回の授業では、次の採拓に進む。

（八）仕上げの着色

刻字作品は、金箔を貼ったり、木地や文字の部分に着色して完成となる。木地の木目を活かすため、茶渋や柿渋を塗って完成とする場合もある。

六、採拓の学習

ここでは、制作した刻字作品を使い、拓本採拓をする。

（一）拓本の採拓法（丸数字は写真番号に対応する）

⑬タオルを濡らす（片手で絞る程度の水分量がよい）。左手で、紙をのばしながら、空気を押し出し、シワにならないように、水張りをする。

⑭紙をこすらないように、紙に垂直にブラシ打ちをし、しっかりとめ込む。半紙を乗せブラシ打ちをすると、水分をとることができる。室内時は、時間短縮のためヘアドライヤーで乾かしてもよい。

⑮親タンポ（小さい方）に、墨壺（タッパーに磨った墨をスポン

写真⑬

⑭

⑮

⑯



⑰

⑱

⑲

⑳



ジに含ませて、墨がこぼれないようにしてある）よりこするように取り、打つ方のタンポにこすり移す。

⑰タンポの跡が残らないように、重ねるように、少しずつ移動しながら打搦する。墨は、一度に濃くすると滲むので、注意すること。

⑲同じように、紙面全体を三回位重ねて打搦する。濃さが均一になるように打搦する。

⑳隅から（石碑の時は下から）、丁寧に少しずつ剥がす。

⑲剥がして裏面に墨が滲んでいなければよい。

⑳ 完成した拓本

(二) 拓本の採拓法について

一般には、石碑の場合、写真の採拓法が基本になる。後述の(ア)から(ク)の物により、紙の貼り方、水張りなどが多少違ってくる。実拓本(日本三古碑はじめ、いろいろな拓本)を鑑賞し、その採拓法を学ぶ。

ア、一般的な石碑の採拓法

イ、大きな碑(大画仙紙一枚以上)

ウ、石仏(立体仏)

エ、鐘銘(円形の立体物)

オ、木額

カ、印の側款

キ、陶板、磚

ク、硯面、文様など

(三) 拓本を採る時のマナー

ア、碑の管理者に必ず採拓許可を取り、終了後はお礼の挨拶を忘れないこと。

イ、碑には絶対に墨を付けないこと。

ウ、碑の付近にある草木の枝に注意し、折らないように気をつけること。

エ、墨の入れ物は、石の上は避けて、土の上に置くこと。

オ、碑に付着した苔は落としてよいか確認すること。

カ、採拓完了後は、碑面をよく洗うこと。

(四) 採拓体験の意義

拓本採拓は、高等学校の教科書に頻出する拓本、あるいは、宋代以来盛んに行われた法帖という形式を学生に理解させる上で、新鮮な体験として受け止められると思われる。

採り集めた拓本を、冊、軸、団扇、扇、屏風、障子、ふすまなど、生活の中に活かして鑑賞できると、書を愛好する心情を育て、感性が高められる。

この授業で制作した拓本と、刻字作品(その後着色する)を額に入れ、部屋のオブジェとして楽しむことができる。

七、おわりに

初めての刻字授業で、隸書を刻字に応用することにより、書稿の重要性和、刻る行為を体感でき、大変ではあったが、無心になって刻り上げた達成感、とても嬉しかったとの声が学生から聞かれた。美しい作品を創る行為とはどのようなものかを知り、短い時間ではあったが、幅広く学習できる教材だと思われる。

筆と刀との関わり合いは、現在でも、筆鋒、鋒先というように筆自体が刀にたとえられている。書作品について、「鋭利な線」「切れ味の良い線」などという言葉がよく使われているのも、その表れである。

書を学ぶ人が古典の臨書を進めていく場合、碑版、法帖などを原典にするが、そのほとんどが「刀」で刻された表現のものである。

それを採拓し、さまざまな碑帖が真蹟の永久保存の役割を果たし、その存在価値は大きい。ここで採拓した体験は、碑法帖を鑑賞する

うえで大変役立つことは間違いない。

採拓法を学び、日本の三古碑はじめ、いろいろな拓本を鑑賞させることは、書の伝統と文化について理解でき、生涯にわたり書を愛好し、高い感性を育むことができる。

現代生活においても、この授業で学んだことは、今後新しい発見とともに、書を楽しむことができる。書を指導する立場の学生には、篆書・隸書学習の応用により、充実した授業づくりに活かしてほしい。

参考文献

- ・文部科学省『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料「高等学校 芸術（書道）」～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～』国立教育政策研究所 2012
- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』教育出版 2010
- ・全国大学書写書道教育学会編『明解書写教育』萱原書房 2009
- ・『書Ⅰ』教育図書 2017
- ・『書Ⅰ 指導資料』教育図書 2017
- ・『新編書道Ⅰ』教育出版 2017
- ・『書Ⅰ』光村図書 2017
- ・『書の古典と理論』全国大学書道学会編 光村図書出版株式会社 2014

* 武蔵野大学教育学部